

# 不幸を嘆く女たち

## —予且「浅水姑娘」試論—

杉 村 安幾子

### 1. 序

女子は職業を持つべきなのか？嫁ぐべきなのか？嫁いだ後は夫と同じように社会に出て勤め、家の財産を増やすべきなのか？子供を産むべきなのか？子供は家庭内の喜びを増やしてくれるのか？これらの問題はどれも肯定的な答えを得られるべきであるが、悲哀と本意でままならない思いも潜んでいるようだ。もし私たちが一層深く入り込んで観察してみると、少なくとも喜びの中に溜息も隠れているようだ。優しい微笑みの眼の内には辛酸の涙も含まれているのだ！〔3頁〕<sup>1)</sup>

この文章は、現代日本の女性の苦悩を含意したものではない。或いは、現代であれば、どの国の女性の苦悩をも言い表したものと受け取れるだろう。しかし、上記の一段は1942年、即ち民国期中国に書かれたものであった。

中国の1940年代は戦争の時代であったと言える。前半は抗日戦争の真っ只中にあり、国民党と中国共産党の合作によって対日本の一元化態勢が目指され、日中の全面戦争が展開されていた。その戦争は1945年8月15日に日本の敗戦をもって終結を迎えるも、抗戦勝利の喜びも束の間、翌年に第二次国共内戦が勃発する。1940年代は、後半も中国国内は落ち着かない状況に置かれていた。

しかしながら、戦争という極限下においても尚、文学界は決してその営為の歩みを止めることはなかった。例えば徐訏（1908-1980）の『風蕭蕭』（1943）や無名氏（1917-2002）の『北極風情画』（1943）など、「通俗作家」の作品がベストセラーになっていたし、日本の軍人の情婦であった女性の生きづらさを焦点化した丁玲（1904-1986）の『我在霞村的時候（霞村にいた時）』（1944）や都市に住む知識人の精神的苦悩を描いた巴金（1904-2005）の『寒夜（寒い夜）』（1947）など、既に名のある作家たちがより深化を遂げていた。また、張愛玲（1920-1995）の代表作「傾城之恋」や「金鎖記」を収録した小説集『伝奇』（1947）や銭鍾書（1910-1998）が新旧知識人の生態を諷刺的に描いた『围城』（1947）といった、現在にも多くの読者を擁する作品が刊行されたのもこの時期であった。

こうした中国1940年代に刊行された作品は、戦争を直接的に描いたものもあれば、そうではないながらも、戦争の影が微かに、だが確実に織り込まれているものもある。そして、そのような文学作品において、国家や民族の存亡に係るこの戦争という極限状態の中では、何故か女性登場

人物のみが、とりわけ美しい女性のみが悲劇的な運命を辿るという構図が描かれることが多い。ここで謂う「悲劇的な運命」とはほとんどの場合は死であるが、悲痛のあまり正常な判断力や思考力を失うという状況をも指す。これらの美女が悲劇的な運命を負わされている意味としては、男性主人公の国家や民族への英雄的献身の代償を指摘できるだろう。即ち、美女の悲劇的な運命は、戦時の愛国的・民族主義的な行動原理や崇高な職業倫理といった男性主人公の生の大義名分と引き替えなのである。「民族の英雄が美女も手に入れました」というハッピーエンド的な筋では得られない、読者の涙と感動を誘う機能が付与されており、美女の死があるからこそ男性主人公の生が光り輝くという対比となっていると言ってよいだろう<sup>2)</sup>。

こうした美女の悲劇的な運命は、大抵は男性を主人公とした大義名分の旗幟や戦いの物語の中で展開されているが、1940年代の作品でありながらも民族や国家の問題から離れ、戦争の影をほぼ見出せないのが冒頭で引用を挙げた予且（1902-1990）の長篇小説『浅水姑娘（浅水お嬢さん）』（1942）である。この作品に溢れているのは当時の女性、といっても一般の女性ではなく、1940年代当時の中国ではまだ少数であった女学校で教育を受けた経験のある女性の日常の生きづらさである。学校教育を受けたからと言って社会で有用な人材になり得る保証がある訳ではないにせよ、生存それ自体が困難な人びとが大勢いた民国期中国にあって、学校教育を受けた経験はとりもなおさず経済的に余裕のある家庭、女兒にも教育をを考える保護者の存在を意味している<sup>3)</sup>。では、そんな恵まれた立場の女性たちは何に生きづらさを感じていたのか。本稿では『浅水姑娘』を通して1940年代中国における女性たちの声に耳を傾け、「浅水姑娘」の意味を探っていきたい。

## 2. 予且と『浅水姑娘』

### 予且

まずは作者予且について見ていこう。予且に関しては、これまで日本では専論はなく、言及した論考も多くはない。そもそも伝記的事象の記述も少ないのだが、現在知り得ている略歴を確認しておく。

予且は1902年6月1日、安徽省涇県に生まれた。本名は潘序祖、字は子端であり、筆名として潘予且、予且、水繞花堤館主がある。潘予且としては1923年の『小説世界』における一幕劇「父母之心」などを発表しており、水繞花堤館主としては1939年に上海中華書局から『命学新義』を刊行している。筆名としての使用が最多である予且は、1930年代に長篇小説の創作を開始した際に使用したものであった<sup>4)</sup>。

中等教育経験の詳細は不明だが、予且は米国聖公会のミッション系大学であった上海の聖ヨハネ大学に入学する。1925年5月30日、上海の共同租界において、学生・市民デモに対するインド人・中国人警官隊の発砲によって多数の死傷者が出た五・三〇事件が起きる。これを受けて聖ヨハネ大学当局は教員や学生の社会活動を禁じるが、予且はそれに対して強く反発し、6月3日には仲間とともに退学した。これは「聖ヨハネ大学六三離校事件」と呼ばれており、予且自身、本名の潘序祖名義で「六三離校運動之評価」（『光華附半月刊』第10期、1933年）を発表している。事件後、予且は光華大学に転学する。

この光華大学とは、上記六三離校事件に際して聖ヨハネ大学を離脱した572名（うち教員19名、

学生553名)が1925年9月3日に学生の保護者や各界の有力人士の大々的な支持を得て、上海で立ち上げた大学である。「光華」の名は「光我中華(我が中華を輝かせよ)」を意味しており、米国ミッション系であった聖ヨハネ大学の強権への抗議の念が籠められている。光華大学は開学当時、中国文学系の系主任を銭基博(1887-1957)が、政治学系の系主任を羅隆基(1896-1965)が、教育系の系主任を廖世承(1892-1970)が、社会学系の系主任を潘光旦(1899-1967)が務めるなど、当時の著名な学者が集結しており、上海における私立大学としては復旦大学、大同大学、大夏大学と並んで「四大金剛」と称される有名大学となった。中華人民共和国成立後、大同大学と合併し華東師範大学となり、現在に続いている。光華大学における教授経験者としては胡適(1891-1962)、徐志摩(1897-1931)、錢鍾書らがいる<sup>5)</sup>。

予且は大学卒業後、光華大学附属中学で西洋史を教えつつ、小説や散文の創作を行っている。また、学内で話劇活動を熱心に展開し、戯曲や劇評、演劇理論なども執筆した。抗戦中は、一時上海を離れるが、1939年に戻り、通俗小説を次々と発表。長篇小説に『女校長』『金鳳影』等がある。短篇小説には『両間房(二間の部屋)』や都市の市民生活を描いた「尋燕記」「移情記」「追無記」などの「〇〇記」シリーズがある。孤島期・淪陷期上海における重要な通俗小説家だとされるが、1950年代以降、上海の中学で教鞭を執っていたこと以外、情報はあまりない。1990年に亡くなった<sup>6)</sup>。

予且に関する研究は中国本国でもあまり進んでおらず、「公平に言うならば、目下の新文学研究界が予且の人となりや事績をいくらか知るばかりで、それも決して多くはなく、著者も(中略)ようやく偶然にして三、四十年代の上海文壇に、このように多作で文章もうまければ内容も伴った文学の書き手がいたと知ったほどである」<sup>7)</sup>と評されるほどだが、作家としては以下のような評価がある。「予且は上海の新市民小説の代表な作家である。彼は旧い鴛鴦孤蝶派の刊行物への投稿から始め、新文学の小説様式を用いて上海の路地に住む市民の日常の人生模様、社会模様を表現した。特に既婚の男女の家庭生活と心理の描写を特長としている。小説は面白さを重視しており、他人が軽視しがちな平凡で些細な事柄に都市のごく普通の人びとと物質の関係を力を含めて示している。描写は軽やかでありながらも軽佻ではなく、市民読者の好むところとなり得た」<sup>8)</sup>。また、「予且の短篇のほとんどは刊行物の第一篇として掲載され、長篇もまた幾つもの連載作品の最初の掲載作品となっている。あたかも「南方の帝王」の様相であった」<sup>9)</sup>との評があり、現在ではほぼ忘れられた存在とは言え、活躍時期には相当の人気作家であったことが窺える。

予且について比較的まとまった紹介と分析を行っているのは、呉福輝と許道明である。呉福輝は「予且小説論」で「海派の通俗小説家として、予且は論じるべきであると思われる。予且の価値はまさに「海派」と「通俗」という層の上にあるのだ」<sup>10)</sup>とする。大都会上海に形成された西洋風で物質快樂主義的な文学作品やその傾向を「海派」と称するが、呉は予且をその海派と通俗小説の融合だと見なしているのである。そして、予且が他の通俗作家同様、結婚や恋愛を小説のテーマにしながらも、「しかし、予且の結婚恋愛物語には結局のところ、旧式小説の古臭い雰囲気はなく、思想的な意識も深くはないものの、それは思想的な意識がないこととはイコールではない」<sup>11)</sup>と評し、上海の男女の結婚や恋愛の矛盾や市民生活に潜む新旧の価値観の衝突などを鋭く描き出したとしている。

他方、許道明は著書『海派文学論』(復旦大学出版社)の第八章において、予且の作風について

て丁寧に解説をしている。特に予且が上海の小市民を主人公とした作品を多く発表したことについて、上海を舞台にして作品を発表していた他の作家と比較し、次のように述べている。「しかし、彼（予且）は、旧い世界や因習の人情やら世古やらがどれほどその頑強な力で現代の生活を引きずっているかを、他の作家よりもずっと多く我々に告げているようだ。上海の多くの家庭は個人的で輝く存在であるわけでもなく、また特別な生活上の起伏もない。ほぼいつでも上海市民のみが耐え得る小さな悲しみや喜びを演出し続けている。どうにかして生きたいと切羽詰まりながら、いい加減なその日暮らしをしているのだ」<sup>12)</sup>。中国における予且作品評はこの許道明の指摘に集約されるだろう。

### 『浅水姑娘』

『浅水姑娘』の作品末尾には「民国31年7月7日写成」とある。即ち1942年7月7日に書き上げたということである。雑誌『小説月報』に1942年10月1日の第25期から1943年10月15日の第37期に連載された。

中国近現代文学研究においては、『小説月報』と言えば、一般的には1910年7月に上海商務院書館から刊行され、茅盾（1896-1981）と鄭振鐸（1898-1958）という優れた編集がいたことで、中国における新文学の形成・展開に大いなる貢献をした月刊雑誌を指す。しかしこの『小説月報』は、商務院書館が1932年1月の上海事変において日本軍の爆撃を受けて終刊となったため、『浅水姑娘』掲載誌とは同一のものではない。中国では区別のために「『小説月報』（後）」などと記載される雑誌である。

この『小説月報』（後）は顧冷観（1910-2000）の編集により、1940年10月1日に上海聯華廣告公司出版部から創刊された月刊誌であった。1944年11月25日に全45期を世に送って終刊となった。編集は「創刊の辞」において「純粹で汚れなき原則」を掲げ、「私たちには派閥にとらわれた芸術的偏見はありません。新文学でも旧文学でも、各種のスタイル全てを歓迎致します」と呼びかけた。主要な掲載作品として包天笑（1876-1973）の「換巢鸞鳳」や「燕歸來」、程小青（1893-1976）の「鸚鵡聲（オウムの声）」「怪旅店（風変わりな宿）」、李薰風（生没年不詳）の「風塵三女子（落ちぶれて妓女になった三人の女）」、張恨水（1895-1967）の「趙玉玲本紀」などがある。これらの作家は当時、推理小説や社会派小説などの分野で既にベテランであった面々である。小説以外にも周瘦鵬（1895-1968）「蘇州雜記」、包天笑「釧影樓筆記」などの隨筆も掲載された<sup>13)</sup>。

『浅水姑娘』のあらすじは以下のとおりである。女学校に通う浅水は、母親から女の人生など碌なものではないと言いつけられて育った。親友の凌湘は女学校を中退して結婚しても早速夫との関係がうまくいかず、他の学友も結婚してもすぐに離婚騒動を起こすといったさまを目にし、浅水は女学校を辞めて働き始める。しかし、職場の雰囲気悪さに働き甲斐を見出せないどころか嫌気がさし、早々に辞職。結婚の方がましだと結婚するも、結婚生活も不満と不安だらけであった。

本作は浅水の生き方を物語の一応の主軸とはしているが、彼女の母親や女学校の同級生たち、親戚、周辺の男性など、多くの人物が物語の主展開と関係があるような、ないような形で登場する。その意味では、大都市の群像劇的側面もあるとも言えるだろう。



### 3. 「浅水」の含意——母からの呪縛・女性という枷

ここでタイトルになっている「浅水姑娘」の「浅水」について考えておきたい。浅水は『浅水姑娘』において主人公的存在ではあるが、明確な主人公ではない。これは例えば鲁迅『祝福』(1926)においては祥林嫂が、張愛玲『傾城之恋』(1944)においては白流蘇が主人公であると言い得るような、鮮明な性格付けや強烈な印象を残す存在では決してない、という意味においてである<sup>14)</sup>。そもそも「浅水」は本名でも綽名でもなく、作品中で仮に付されている呼び名に過ぎない。作品冒頭で「本書の主人公は姓名を読者に告げることを望んでおらず、記憶と認識の便宜上、仮に浅水姑娘と呼んでおこう」〔3頁〕と語られ、以後姓も名も伏せられたまま物語は展開していく。

「浅水」は浅い水つまりや川の浅瀬を指す語であるが、これは浅水の母親が娘に告げた「今の私たちは、天に昇って月を手に入れることもできなければ、海に潜って真珠を探すこともできない。ただ浅瀬を漂流しているだけなの」〔5頁〕から来ている。母親が自らの生き方の辛さを女性一般の生き方の辛さとして敷衍しているのである。

この「浅水」のイメージは、早くも唐代の司空曙(740-?)の「江村即事」という詩に見て取れる。

江村即事 司空曙

釣罷歸來不繫船	釣を罷 <sup>やめ</sup> て帰来 船を繋 <sup>な</sup> がず
江村月落正堪眠	江村 月落ちて 正に眠るに堪 <sup>たえ</sup> たり
縱然一夜風吹去	縱然 一夜 風吹き去るとも
只在蘆花淺水邊	只 蘆花 浅水の <sup>ほとり</sup> 辺 <sup>あら</sup> に在ん

(釣りをやめて帰って来たが、船を繋ぎ止めることはせずに乗り捨てた。川辺の村に月がかり、丁度眠るのにふさわしい頃合いだ。たとえ今夜のうちに風が船を吹き流してしまったとしても、この蘆の花の咲く浅瀬の辺りを漂っているだけだろう)<sup>15)</sup>

詩の風景としては美しいが、この詩における「浅水」は、船を流し去ってしまうような強力な川の水ではない。蘆が茂るほどに岸に近い水際であり、水量も少ないごく浅瀬に過ぎない。「浅水」という呼び名は、水の淀んだ浅瀬を、自分の運命を切り拓くことのできない非力な女性の嘆きの象徴としたと見て間違いないだろう。

こうした「浅水」という呼び名は、浅水の作品中における運命を既定している。浅水の母親の語る女の生き方がまさにそれを表しているのである。母親が医師と語るシーンを見てみよう。

浅水の母親は冷たく笑ってこう言った。「生活なんてものは実際のところ、人が重視するに足るものじゃありません。以前、私は女はいかなる人にも頼るべきではない、自分自身を頼るべきだって思っていました。十数年来、私はこのわずかばかりの持参金で生活してきましたよ。生活すればするほど意味なんかないんです。しかも私自身もしょっちゅう娘のことを考えます。娘の前途も、私からすればひどく暗澹として望みなんかありませんよ。娘が女学校

を卒業しても、その先大学に入る力はありませんから。大学に入れなかったらどうするのか？ 適当な相手を見付けるだけのことです。たとえ適当な相手が見付かっても、子どもを産んで育てるだけのこと。子どもを産んで育ててどうなるのか？ その先は考える勇気ありません」 「あなたの思想は悲観的に過ぎますよ！」

「悲観とか楽観じゃないんです。事実がこの通りで、私たちには脱け出す方法がないんです」  
〔14-15頁〕

「事実がこの通り」と述べる母親は四十代半ばにして、自身ばかりか娘の人生まで諦観している。彼女は夫が8年近く家を離れ外地で働いており、完全に別居状態の中で浅水を一人で世話してきたのだが、「(夫からの)手紙？手紙なら来ますよ。それにいくらお金も寄越してくれます。でも、私たちはお金のみでは生活できません。家庭の温かさを育んだり、娘を教育したりということについて、母親一人にのみ頼って、どうしてうまくいくなてことがあるでしょう？」〔14頁〕と語るように、一人で家庭を支えることの困難を強く感じているのである。

母親の慨嘆は次のように続く。「私を悲観的だとおっしゃいましたね。李先生、この窓辺の鉢植えの花をご覧になって。どれも私が自分で植えて育てたものです。花を植えて育てるのって、当然いくらか活力を必要とします。花を植えた時は、誰だって花が咲けば良いなと思いますが、花が咲いてしまえば、花とは散るものだって知って、味気なくなっちゃうんです。私の娘、私の花、そして私自身、この広い世界で同じ運命に出くわしているんです」〔15頁〕こうした母親の人生観に縛り付けられているかのように、浅水は女学校を中退して働くようになる。その際に彼女の気持ちを就職に傾けたのは、母親の人生観だけではなく、かつての学友馮彩雲の姿であった。

馮彩雲は女学校を中退し、条件の良い男性と結婚したのだが、「浅水の記憶では馮彩雲はふっくらとしており、今のようにやつれてなどおらず、身に着けているものや髪型なども無論今日のように乱れてなどいなかった。以前の彼女は見目麗しい少女だったのに、2、3年のうちにどうしてこんな中年婦人になってしまったのか」〔39頁〕と浅水を驚かす変貌を遂げて登場する。馮彩雲は夫の不貞に耐えかねて離婚を望んでいるのだが、弁護士に、現在まともな生活をしていけるなら、夫の不貞など耐えるべきだと言われ悩んでいた。浅水を就職へと向かわせた馮彩雲のセリフは以下の通りであった。

「私、以前の自分の考えが間違ってたって凄く後悔してるの。学校に通って勉強するお金が家になから、私の前には道は2本しかなかった。1本は仕事を探す、もう1本は結婚よね。私は後者を選んだけど、当時も別に結婚を重く見て、就職を軽く見たってことじゃないのよ。厳密に言うと逆ね。私は職業ってというのは、女にとっては難しいことで、結婚は女にとって簡単なことだって思ってたわけ。(中略)同時にこうも考えてたの、就職は私の最終的な目的じゃないけど、結婚は私の生活の問題を解決してくれるって。今ではそれは完全に間違ってたって思う」〔40頁〕

浅水は在学中の馮彩雲と親しかった訳ではないが、馮彩雲の不幸な結婚生活を知り、働く決意をする。しかし、親友凌湘の父親の口利きで小学校の教員になったものの、3日もしないうちに

自分の望む仕事ではないと感じる。同僚の女性教員との関係も悪く、彼女に好意を寄せてくれた校長のプロポーズを逆に侮辱のように受け取り、凌湘の父親に言いつけ、校長の立場を悪くする。

「これが仕事をするってこと、経済的独立ってことなのね!」「社会って本当に真っ暗だ」〔54頁〕  
 と思い、結婚の方がまだマシだと考えるようになる。結果として早々と辞職してしまう。そして親友凌湘の「浅水!一つ聞くわね、女の子は嫁ぐべきかしら? (中略)もし私たちが女子国の住人なら、そんなこと話題にする必要なんかないわよね。いかんせん、私たちは女子国なんかにいないし、この世には男がいて女もいるの。しかも、男は妻を娶り女は男に嫁すということもあるわけよ」〔11頁〕という言葉の通り、社交界で人望を集めている包夫人の紹介によって結婚する。

浅水が結婚に対して希望や期待を寄せている描写はない。淡々と結婚話が進み、結婚し、子どもも産まれるが、子どもの乳母の件で姑と衝突し、夫は雰囲気が悪くなった家には近寄ろうとせず、外に愛人を作る。夫の愛人がかつての自分の女学校時代の同級生だと知り、浅水はショックを受けるが、次のように諦観する。

彼女は女というのは不幸なものだと感じた。それに女たるもの結婚なんてしょうものなら、更に不幸である。自分、凌湘、自分の母親、馮彩雲、みんな同じ運命を辿っている。

母親が冷酷無情であったのは、結婚が彼女をそうさせたのだ。母親が夫に対する感情を殺し、辛い思いをして自分を養ってくれたのは、なんと辛く悲しい道であったことか。そして、また自分の娘が自分と同じ道を歩んでいるのを目にするなんて、本当に悲惨過ぎる。

「悲惨な運命というものは定めなのかもしれない。自分も夫に対する感情を殺し、専ら二人の子どもが成人するまで世話をしよう!」〔178頁〕

ここには浅水が母親を自分と同一視しているさまを見出せるだろう。前述の母親の「娘の前途も、私からすればひどく暗澹として望みなんかありませんよ」との慨嘆は、結果として娘の生き方を正確に言い当てたものとなった。浅水は凌湘が夫の愚痴を述べても「夫婦の道なんてそもそも研究に値しない。研究したところで言葉の無駄でなければ、時間の無駄」〔183頁〕と返すまでになる。

ラストシーンは浅水と凌湘が女学校時代の同級生の婚礼に参列する一段であるが、物語の最後は次の通りである。

浅水は (中略) 少しも葛逢英の婚礼を讃美しようと思わなかった。ただ、心の内で次のように思っただけだった。

「憎むべき男どもが、またもや私たち姉妹の中の一人を、憂鬱で苦しく失望だらけの道に引き込んだってわけね!」〔184頁〕

タイトルロールたる浅水は、「浅水」の呼び名を冠せられたことで母親の呪縛から脱け出すことが出来ず、物語は幕を閉じる。浅水はそもそも自分を縛る母親の人生観から脱け出そうとしたのかという問いを立てて顧みると、脱け出したいという強い意志は描かれず、母親の人生観の中で右往左往しただけであるようにも見える。

#### 4. 様々な女性たちと「女性らしさ」からの逸脱

以上見てきたように、浅水は就職でも結婚でも辛い思いをし、特にラストの一段が示す通り、結婚生活など「憂鬱で苦しく失望だらけの道」だと見なしている。こうした彼女の生き方は、女性の生きづらさを娘に示し続けた母親の生き方の再生産と言えるだろう。

他方、『浅水姑娘』は群像劇的側面があると既述したように、多くの女性の様々な生き方が示されている。それを概観してみよう。

浅水の親友である凌湘は、女学校を中退して学校医の李星如と結婚する。李は活躍中の優秀な医師であったが、凌湘と李は次第にすれ違っていく。凌湘が夫を束縛しようとすればするほど、李は彼女から逃れようとし、ラストでもそうした追う妻と逃げる夫の構図は描かれる。

浅水や凌湘の同窓であった黄婉貞は女学校を中退し、食べていくために一種の愛人業に身を落とす。その過程で浅水の夫とも関係を持つ。自らのそうした生き方を自嘲的にとらえているが、生きていく上での仕事のようなものだとの割り切りもある<sup>16)</sup>。

浅水の母親は、夫が遠方で仕事に従事しているため、別居婚を強いられ寂しい日々を送る。病気になる夫を世話するために、娘を一人残し外地に向かうが、夫の世話には自身の存在意義を見出しているようである。

社交界で活躍する包夫人は、有能で精力的なマダムとして描かれている。早くに亡くなった姪によく似た浅水を気に入り、姪と結婚させる予定であった鼎新を浅水に紹介し結婚させるなど、企画力実行力ともに優れている。

その包夫人の秘書的存在なのが王嫂子である。彼女もやり手の野心家であり、包夫人の死後は包氏の愛人として、自身が女主人に成り上がり包家に君臨する。

浅水たちの女学校の国文教員は、名は挙げられていない。厳格な教師に見えて、実は支配的管理的であり、狭量な人物として描かれ、浅水たち現役の女学生に「学問をして社会で働くにしても、ああはなりたくない」という反面教師的存在となっている。

その中で、読者に強い印象を残す人物が二人いる。うち一人は、凌湘の夫李星如の勤務する病院の看護師の水月明である。水月明は優秀な看護師であったが、尊敬する李医師と不倫関係になり、息子を出産し、李の実家で姑の世話をし最期を看取る。本作において、水月明だけは愛する男性と結ばれ、息子の出産、更には姑を看取るという、異性愛を基本とした伝統的な家制度の成功者である。彼女は、李医師に凌湘という正妻がいるという事実についても、当初は気にかけていたものの、李医師と凌湘の夫婦関係の悪化に伴い気に留めなくなる。「正妻」であることは望まず、加えて看護師として働いていたことを受ければ、水月明は自分の望むものを実質的に自力で手に入れた唯一の女性と言えるだろう。

もう一方は、凌湘の従姉の謝松筠である。彼女は独身主義を貫き、親が多くの遺産を遺してくれたこともありマンションで一人暮らしをしている。職種は明示されていないが、社会的責任のある仕事をしているようでもある。彼女が興味深い存在なのは、ハウスキーパーには「お嬢様」ではなく「旦那様」と呼ばせ、浅水には「松哥（松兄さん）」と呼ばせるなど、自らを「男性」視している点と、同性の友人としてではなく浅水を好きな点である。浅水は凌湘の紹介で謝松筠



の家でしばらく生活するのだが、謝松筠は浅水に性的な手ほどきをする。謝松筠が自分が読んで  
いる本に興味を示した浅水に、『浮生六記』を読ませるくだりを見てみよう。

「……付き添いの婆やがそばかりしきりと休むようにせきたてるので、戸を閉めて出て行く  
ようにいいつけ、そして二人、肩を並べて冗談をいい合うと、まるで親しい友人とふたたび  
めぐり逢ったような気がする。たわむれに彼女の胸に手をさし入れてみると、やっぱりひく  
ひく跳っているの、その耳元に口をあてて、

「君、どうして胸をそんなにひくひくさせているの」

とささやくと、芸は眸をめぐらして、にっとほほえんだ。と、忽ちひとすじの情けの糸が人  
の魂を揺がすかと思われ、彼女を擁して帳に入り、東方のすでに白んだのを知らなかったの  
である。……」

浅水は顔が熱くなったように感じた。彼女の心臓は本当にドキドキと跳ねており、こっそり  
謝松筠を見ると、彼女も浅水を見つめていた。ふいに謝松筠は自分の手を浅水の懷の中に差  
し入れ、笑いながらこう言った。

「あなたもドキドキ言ってるのね！」〔79～80頁〕<sup>17)</sup>

『浮生六記』とは清の沈復（1763-1808？）が、愛妻陳芸ちんうんとの思い出を中心に据えて綴った随筆  
である。浅水が読まされるのは、まさにその『浮生六記』における新婚の夫婦生活を描写した一  
段であり、性的経験のない浅水を謝松筠がより親密な関係になろうと図ったものであった。実際、  
上記の引用の後には二人が揃って共寝する場面が続く。

尤も、本作における謝松筠の性的嗜好は明らかだが、浅水については曖昧にされている。謝松  
筠との関係は受け入れながらも、自らの将来の安定のために謝松筠との同居をあっさり解消する  
からである。

孔慶東は次のように指摘している。「経済という角度から恋愛を扱ったものとしては、予且の  
小説がより代表的な存在だろう。予且の作品には、そうした衣食住や仕事といったことを少しも  
考慮せず、愛情の虚空の中で生活するロマンチックな男女などこれまで登場していない。予且は  
夫婦の謎、男女の謎、結婚や恋愛の謎を詳細に研究することに力を注いでいたが、その研究の結  
果は「結婚と恋愛などこの程度のものだ」であった。彼の『乳娘曲』『金鳳影』『浅水姑娘』など  
の長篇や大量の短篇に登場する女性主人公は、みな物質生活の実際利益の角度から自身の結婚  
や恋愛の方向を調整しており、経済という分銅は恋愛感情の天秤においてことのほか重いように  
見える。こうした登場人物たちは恋愛感情や生活上の興味がわからないのではなく、愛情よりも  
更に重要なものがあると気付き、理解できているということなのだ」<sup>18)</sup>。まさに孔の指摘の通り、  
浅水は「物質生活の実際利益の角度から自身の結婚や恋愛の方向を調整」する。そこには、異  
性愛か同性愛かという問題意識は全く介在していない。こうした女性同士の関係が当時どのよう  
にとらえられていたのかについては他の作品例も挙げて別稿で論じることとし、本稿ではひとま  
ず措く。ここでは浅水らが既に陥っていた当時の「女性らしさ」とでも呼ぶべき生き方から逸脱  
していた、もといそうした呪縛から自由であったという点において、また自立を支えていたのが  
親の遺産であったという点において、謝松筠がかなり特殊な位置にいたことを強調しておく。

『浮生六記』の引用の意味する所に話を戻そう。『浮生六記』は新婚の妻との楽しい思い出を綴ってはいるが、作者沈復は妻とともに両親に勘当され、実家を追われた後に妻が41歳の若さで亡くなり、更にはその妻との間の子どもにも先立たれるという不幸を辿る。元々、『浮生六記』という題名も唐代の詩人李白（701-762）の有名な「春夜宴従弟桃花園序」中の「浮生は夢の<sup>ごと</sup>若し、<sup>いくばく</sup>歎を為すこと幾何ぞ（定めなき人の生命は、夢のごとく、歎び楽しむ歳月は、どれほどもない）」<sup>19)</sup>に基づくため、「浮生」に籠められた意味ははかない。『浅水姑娘』において『浮生六記』が引かれるのは、必ずしも謝松筠が新婚の夫婦の仲睦まじさを浅水に意識させることのみではなく、作者沈復が辿った不幸な後半生を前提として、謝松筠と浅水の関係の破局を含んだ、浅水の先行きをも暗示していたと読めるだろう。

## 5. 予且の大東亜文学賞受賞をめぐる

予且については陳青生による次のような紹介がある。

上海の陥落前、予且は文壇において決して目立つ存在ではなく、断続的に小説を発表する学者タイプの作家の一人だった。上海陥落後、彼の名声は急激に増し、一時期は相当目立つ存在となった。そのような状況が生じた原因は主に二点ある。その一、予且は1942年末に汪精衛グループによって「中国作家代表」に選ばれ、日本の東京で開催された第1回「大東亜文学者大会」に出席し、彼自身の『予且短篇小説集』と『日本印象』が翌年の「第1回大東亜文学賞」の「次賞」受賞作品に選ばれた。このような「荣誉」のある中国作家は数としては極めて少なく、それゆえに予且の知名度を大幅に高からしめたのである——たとえそれが決して良い名声ではなかったにしても。<sup>20)</sup>

1942年11月5日、第1回大東亜文学者大会が開催され、大東亜文学賞の設置が提案了承された。翌1943年8月、第1回大東亜文学賞が発表されたが、正賞の受賞作はなく、中華民国の次賞に予且の「予且短編小説集」「日本印象」と袁犀（1920-1979）の『貝殻』が選出された。同年8月28日の朝日新聞には次のように載った。

「輝く“次賞”六氏」

本年度創設された大東亜文学賞は審査の結果、該当者なく左の六氏が次賞者と決定した。

△『陳夫人』庄司総一氏、『海原にありて歌へる』大木惇夫氏（日本）△『沃土』石軍氏、『黄金的窄門』爵青氏（満洲）△『日本印象』および『予且短編小説集』予且氏（華中）、『貝殻』袁犀氏（華北）

なほ爵青、予且両氏は昨年第一回文学者大会に代表として参加した人、また満洲の審査では日系作家も授賞の候補となつてゐたが、特に辞退したため満系二名のみとなつた。<sup>21)</sup>

大東亜文学者大会は第二次世界大戦中に日本の国策として開催されたものであり、中国においては無論、戦後日本においても批判がある。そもそもこの大会を主催した日本文学報国会自体が、

第二次近衛文磨内閣政権下の1940年12月、情報機能の一元化を目指して誕生した情報局の指導によって立ち上げられた公益法人であった<sup>22)</sup>。陳青生の文中、大東亜文学賞の受賞が括弧付きの「榮譽」となっている所以である。

予且と同時に次賞を受賞した袁犀については、中蘭英助が次のように述べている。

袁犀はわたしと同年の天才的作家だったが、以前に抗日地下活動容疑者として日本憲兵隊に拘留されていたことがあり、横光利一推薦によるとされた大東亜文学賞授賞は、むしろミューズの神の悪戯というべきであったかもしれない。

しかし、神の悪戯にしては、彼が払わねばならなかった代償はあまりにも大きい。中国の解放後、李克異という新しい筆名で再出発しながら、大東亜文学賞が仇になって反右派闘争から文革にかけて反動文人とされ、四人組追放後に名誉回復されたのもつかの間で病死する。<sup>23)</sup>

袁犀が「反動文人」とされたのであれば、予且が同様の目に遭ったとしても決して不思議ではない。また、中蘭英助は第2回大東亜文学賞の次賞を受賞した梅娘（1920-2013）について「梅娘もいったん台湾に渡り、夫龍光（杉村注：夫の柳龍光は著名な編集者）の死後は北京に帰ったものの、スパイ容疑で収容所に入れられ、子供二人は病死、さらに出所後も大東亜文学賞受賞が仇となって、文革による漢奸文人としての迫害を受けつづけた」<sup>24)</sup>と紹介している。予且の1950年以降の動向が「不明」なのも、間違いなく大東亜文学賞の受賞が関係しており、単なる「わからない」以上の暗い経歴を孕んでいるだろう。陳青生は以下のように述べる。

予且は元々、日本の傀儡政権方面とは密接な関係などなかったようで、陥落後も傀儡政権の要職にもついていない。彼が「代表」とされ、作品が受賞したのも、決して彼本人の主観的な願望や積極的に獲得しようと努力したことによるものではないであろうし、日本の傀儡政権勢力が硬軟両様の戦術を用い、善良な者に悪事をさせようとした可能性を排除できない。しかし、予且は結局のところ拒絶しなかったのだから、上述の行為の客観的な結果としては、とどのつまりは日本傀儡政権の求めに迎合したということであり、少なくとも傀儡政権に利用されたという責任は逃れられないだろう。<sup>25)</sup>

陳青生の筆致からは、予且に対して中立的であろうとしている姿勢が窺える。しかし、今日の中国においては「傀儡政権に利用された」という動かし難い事実が、予且を高く評価できない最大の障害になっているのである。

作家が作品の内容ではなく文学賞を受賞したことで高く評価されるのは、まま見る光景ではある。しかし、文学賞を受賞したという理由で低く評価され、あまつさえ「反動」「漢奸」とされるのは作家個人の不幸であるのみならず、文学という営為全体にとっても不幸なことだろう。戦時下であったとは言え、その不幸を作り出したのが日本であったということに今日の日本人が無自覚であって良いはずはない。

## 6. 結

予且の『浅水姑娘』において、主人公格たる浅水を始め、登場する多くの女性たちは決して幸せではない。1940年代中国の多くの通俗小説においては、女性は悲劇的な運命を与えられるのが一般的であったが、『浅水姑娘』に登場する女性たちも広い意味ではそうした悲劇の女性たちの姉妹と言ってよいだろう。

しかし、『浅水姑娘』では男性の英雄的献身や大義名分は掲げられることはない。ラストの浅水の内心の呟きである「憎むべき男どもが、またもや私たち姉妹の中の一人を、憂鬱で苦しく失望だらけの道に引き込んだってわけね！」は、女性が自身の不幸の原因を全て男性に転嫁しているようにも読める。

更に本稿では論及しなかったが、『浅水姑娘』には男性側、例えば凌湘の夫の李医師や浅水の夫の鼎新などの視点や考えも盛り込まれており、男女が社会や家庭ですれ違う原因が必ずしも男性の家父長的価値観や自己中心性だけではない描写がなされている。それを受ければ、予且は男女の対立や女性への同情のみから本作を執筆したわけではないだろう。また、4. で見た謝松筠のように自ら「女性らしさ」の呪縛から脱け出して自立している例もあり、「女性」が一元的ではなく、多様化しているさまが窺える。

1940年代にベストセラーとなった通俗小説において、ヒロインたちは男性の作り上げた大文字の歴史や男性の大義名分の犠牲者として悲劇的運命を被った。悲劇のヒロインたちは自らの不幸を嘆くこともできず、ただ散っていくのみであった。他方、予且の『浅水姑娘』は死や精神的失調ではなく、自分の置かれた立場を「女性の不幸」と嘆く女性を描いた。現代の読者にとって歴史や大義名分の犠牲者たるヒロインは遠い存在であるが、浅水や彼女の周辺の女性たちはごく近い存在であろう。浅水は女性の不幸を嘆きながら、通俗小説中の女性像の変容をも示している。

### 注

- 1) 予且「浅水姑娘」、『予且代表作』、中国現代文学館編、華夏出版社、1999年10月、3頁。以後、本稿では「浅水姑娘」からの引用は全て本テキストに拠り、亀甲括弧によってページ数を示し、拙訳を付す。
- 2) 1940年代中国の小説における戦争と美女の運命との関係については、以下の拙稿がある。「『美貌』というスティグマ——徐訏『風蕭蕭』における美女表象」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第40号、2021年4月、27-43頁)、「徐訏『幻覚』試論——無名氏作品との関わりで見る感傷に浸る男たち・葬り去られる女たち——」(『日本女子大学文学部紀要』第71号、2022年3月、95-106頁)、「楊振声『荒島上的故事』における自死する少女」(『日本女子大学文学部紀要』第72号、2023年3月、55-66頁)。
- 3) 李華興主編『民国教育史』、上海教育出版社、1997年8月によれば、「不完全な統計」としながらも、1946年時点の全国の中等学校の学生総数は1,878,532人、うち女子が379,087人、総数の20.18%を占めていたという。一見すると少数ではないようだが、抗戦期中国の人口は約5億、また1940年代にはアメリカを模した六三三制の学制を採用しており、「中等学校」は中学校と高等学校の双方を含む。参考までに『浅水姑娘』が連載された1942年に比較的近い年度の統計を用いた。
- 4) 欽鴻、徐迺翔、聞彬編『中国現代文学作者筆名大辞典』、南海大学出版社、2022年9月の「潘序祖」の項を参照。
- 5) 金以林著『近代中国大学研究』、中央文献出版社、2000年2月などを参照。
- 6) 予且の生涯に関しては注1前掲書所収の「予且小伝」、419頁を参照。但し、没年については孔慶東



- 著『超越雅俗——抗戦時期的通俗小説』（北京大学出版社、1998年8月）所収の「抗戦時期重要通俗小説作家小伝」は「1989年」としている。
- 7) 許道明著、『海派文学論』、復旦大学出版社、1999年3月、311頁。
  - 8) 注1前掲書。419-420頁。
  - 9) 注6孔慶東前掲書、68頁。
  - 10) 呉福輝「予且小説論」、『中国現代文学研究叢刊』1993年第1期。なお、当該論文は予且の小説に関する総論的な研究であるが、『浅水姑娘』については「調査待ち」として言及していない。
  - 11) 同前。
  - 12) 注7許道明前掲書。
  - 13) 范伯群主編『中国近現代通俗文学史』上下、江蘇教育出版社、2000年4月と張曦「現代文学的一抹余音：20世紀40年代的『小説月報』」（『上海文化』2016年第8期）を参照。
  - 14) 「主人公」という存在をどのように定義するかについては、前田愛著『増補 文学テキスト入門』筑摩書房、1993年を参照。
  - 15) 司空曙「江村即事」。訓読と解釈は『國譯漢文大成 文學部 第六卷 三體詩』、國民文庫刊行會、大正10年3月を参照。
  - 16) 城山拓也著『中国モダニズム文学の世界——一九二〇、三〇年代上海のリアリティ』、勉誠出版、2014年は、予且の長篇小説「鳳」を取り上げ、ヒロインの「わたしの肉体の生活は、ご飯を食べることだけ。ご飯があればいいの」というセリフに注目している。城山は「予且はこの小説において、「肉体」を資本とした生き方を肯定し、自己の人生を生きようとする女性を描こうとしている」と分析しており、この指摘は黄婉貞の生き方にも通じる。
  - 17) 『浮生六記』の引用は沈復作、松枝茂夫訳『浮生六記』、岩波文庫、1981年10月、27-28頁を参照。
  - 18) 注6孔慶東前掲書、204頁。
  - 19) 李白「春夜宴從弟桃花園序」、松浦友久編訳『李白詩選』、岩波文庫を参照。
  - 20) 陳青生著『抗戦時期的上海文学』、上海人民出版社、1995年2月、241頁。
  - 21) 『朝日新聞』1943年8月28日、3頁。
  - 22) 尾崎秀樹著『近代文学の傷痕』、岩波書店、1991年6月、4頁。
  - 23) 中蘭英助著『わが北京留戀の記』「大戦下北京の文学」、岩波書店、1994年2月、140頁。
  - 24) 注23中蘭前掲書「戦時下に揺れた文学者たち」、149頁。
  - 25) 注20陳青生前掲書、241頁。

## 【附記】

本稿は学術研究助成基金助成金の交付を受けた基盤研究（C）「美女と戦争——抗戦期中国の通俗小説に見る民衆の嗜好」（課題番号：20K00364）による研究成果の一部である。